

奇話十二題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: あせごの, まん メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4850

創作

奇話十二題

あせごのまん

一話 モーレン

学校に行くと、教室の一角に人だかりができていた。

どうせ誰かがエロ本でも持ってきたんだろうと思って覗くと、皆が数枚の写真に見入っていた。

浜で催された盆踊りを撮影したものだった。

着物姿の年寄りが櫓の周りで踊っている。その周りを懐中電灯のようなオレンジの光が筋を引いて飛んでいた。ビー玉ほどの小さなものからソフトボール大のものまで、四つ五つ人々にまわりつくように浮かんでいる。

「モーレンや」

誰かが僕に教えるように言った。

「モーレンって何？」

「人魂とかそんなもんらしい」

これはどこそこの婆さんや、はいじゃこれは死んだ爺さんの人魂か、そんな声がひそひそとささやくように流れた。

翌年、盆踊りの櫓が組まれている横で、僕は海に向かっていくつもいくつも石を放り込んだ。

今年も来てみる、笑いながら大声で叫んだ。

盆踊りを撮した写真には何も怪しいものは写っていないかった。

しかし、打ち寄せる波に向けられた一枚に、海面から突き出た無数の白い手が写っていた。

モーレンとは亡霊が詛ったものだ、後に聞いた。

二話 ボロ切れ

土手に座って草野球を見ていた。別に面白い試合でもなかったが、後攻めのチームのピッチャーに少し驚かされた。

ややサイド気味から、怖ろしく速い球を投げる。キャッチャーは

捕るのがやっという感じだった。何度もミットが大きくはじかれる。相手チームはろくすっぽバットに当てることもできなかった。

ハーフパンツから出たオレの太股を、伸びた草の先がくすぐる。オレは尻をずらして、横へ移動した。

ここまですいぶん長い距離を歩いてきた。オレは一息つこうと、その土手に座ったのだった。

八番バッターは呆気なく三振し、攻守が入れ替わった。

また太股に草の先が触れている。忌々しく思いながら、手で払いのけた。

が、すぐにまた草が太股をくすぐる。

もう一度払いのけようと延ばした指を、ふと止めた。

よく見ると、太股を悪戯するのは、雑草の先ではなかった。

髪の毛だ。

地面から、黒く長い髪の毛の束が生えていた。百本ほどの束。

いや、正確には本数などわからなかった。人差し指ほどの太さの束だ。

それが風になびいているわけでもないのに、オレの太股の方へ先端を伸ばしている。その先が、さっきからオレの太股を撫でていたのだ。

オレは立ち上がって、そいつに気づかれることを恐れるかのように、そっと反対側へ移動した。髪の毛の束はオレが場所を移したことも知らず、先っぽを今まで座っていた方へ向けてそよがせている。気味が悪かったが、オレはまた腰を下ろした。

その途端、海藻が潮の流れで向きを変えるみたいに、毛の束はスーッとオレの方へ先っぽをなびかせた。

慌てて払いのけ、オレは結局また立ち上がった。

いくらなんでも気味が悪すぎた。

女の死体でもが埋められていて、毛が伸びたのかと、理屈に合わぬ想像をした。

もう帰ろうと決めて見下ろすと、毛の先がオレを探してでもいるかのように、グニャグニャと動物的な動きをしてみせた。

オレはゾットして、足早に土手を登りかけた。

と、男がどこからやってきた。ここらを住処とするホームレスらしき風体だ。男はスコップを担いでいた。

無言でそれを毛の束の根本に突き立てた。オレは吐き気をする思いで見つめていた。

ザクザクと土が剔られた。毛の束はなすすべもなく、フラフラと左右に揺れる。スコップがやがて何かを掻き出した。元は赤かったと思われる布の端だった。

ズルズルと布が引きずり出された。

死体は出なかった。布ばかりが出た。上着の五、六着分もあったにちがいない。

ずいぶん念入りに、死体はくるまれたようだ。

男は最後に、薄汚れた綿の包帯らしきものがグルグルと巻かれた塊を掘り当てた。

胎児を包んで埋めたのだと、とっさに思った。

オレの目の前で、男は包帯を解き始めた。

毛の束はすっかりしおれて、地面に横たわっている。

包帯の中からは、何も出てこなかった。

毛の束がビクビクと断末魔の痙攣みたいに震えた。

背筋がいつまでも薄ら寒かった。

三話 換気口

元国営だが現在は民間企業となった我が社には、五年に一回、研修と称する泊まり込み合宿制度みたいなものがある。全国に散らばる支所の宿舎に、各地から集められた社員が一ヶ月間泊まり込んで、割り振られた支所での仕事をこなすのである。

僕に与えられた部屋は、最初から妙に薄気味悪かった。

ゴールドデンウィーク明けの晴れた空の下入室したにもかかわらず、薄暗い廊下の一番奥の部屋は、かび臭いにおいと陰鬱な空気が垂れ込めていた。

普段暮らすアパートも日当たりが悪くて年中ジメジメしているが、そんなに陰気だとは感じない。

宿舎のその部屋は南向きに大きな窓があったが、窓の正面に寺の大きな屋根が見えて、墓地が広がっていた。数人がまとめて首でもくくれそうな大きな柿の木が、墓地の上に枝を張っていた。

研修自体はどうということもなかった。出勤して言われた業務をこなし、報告書を書いて終わりだ。

元お役所仕事の伝統は生きていて、午後の四時半には後片づけも終えておく。残業もなく帰って行くだけだ。

みんな部屋に帰ってもすることがない。だから、毎日早い時間から飲み誘われた。酒は強い方ではなく、部屋にはいつも酔って戻った。給料とは別に一日三千円の手当が出るので、痛い出費だとも思わなかった。地方都市なら三千円で充分食って酔えた。

部屋にはなぜかテレビが二つあった。一つは普通にテレビ台に置かれて、もう一つは押入の中に。

押入の中が壊れているわけではなく——いや、やっぱり壊れているのかもしれないが、夜中に突然点いてしゃべり出すことがあった。初めての時、押入の中から声が聞こえはじめたものだから、僕はびっくり出たと思って部屋を飛び出した。

廊下は薄暗い電灯がボンと灯っているだけで、そこも居心地はよくなかった。真夜中に他人の部屋に駆け込むのも気が引けて、僕はしばらく部屋の前をうろついていたが、耳を澄ませてみると、相変わらず中では声が聞こえていた。

が、どうも恨めしげな様子ではない。笑い声なども混じっている。中へ戻って押入を空けてみると、テレビがお笑い番組を放送していた。

僕は旧式のボタンやつまみをあれこれ押したり回したりしてみたが、結局画面は消えなかった。コンセントの先は押入の床に空けられた小さな穴へ続いている、手で引っ張っても抜けなかった。

諦めて僕は布団に潜り込み、いつの間にか眠ってしまっ、朝に

なるとテレビは消えていた。

管理人に相談すると、その部屋は電波が悪くてたまにそんなことがあると、軽く言われた。そのせいかどうか、部屋にいとスマホのバッテリーがすぐに底を突いた。それだけでも、スマホ依存症の人間なら発狂に値する。

押入の上に設けられた換気口のスリット辺りからは、しょっちゅうカリカリと爪でひっかくような音がしていて、それは部屋を出る前日まで絶え間なく続いた。

その日は朝起きたときから、何かが変わった。部屋の空気がいつもより湿っぽい。

雨が降っているのかと思ったが、外に出ると空には雲一つなかった。

どうにか一ヶ月が過ぎ、残すところは一日となっていた。次の日は午前中に出社した後、各部署の挨拶回りをして部屋を出て行くだけだ。

夜、会社の食堂でささやかな宴が設けられ、その後は二次会にだれ込むこともなく、部屋に帰った。

鍵穴にキイを突っ込んだ瞬間、朝の厭な気分が蘇った。ドアを開けると、まるで何日も空き家になっていたかのような、カビ臭くよんだ空気がただよい出た。

風呂から出ると、もうすることがなかった。テレビを点けたが、見たい番組があるわけでもなく、こんな夜に面白い映画の一本も放

送しないテレビ局に、無性に腹が立ってきた。

スマホは五分ほどでバッテリーが尽きて、明日と言わず、もう今すぐに帰ってしまいたい気分になった。

眠たくもなかったが布団を引っ張り出して電気を消した。

廊下から差し込む明かりで部屋の様子がぼんやり見て取れる。目が冴えて、闇の中で複雑な木目を描く天井ばかりを見つめていた。不意にカリカリと音が聞こえた。

押入の上の換気口だ。細いスリットにまとわりついた蜘蛛の巣が、風もないのに揺れていた。

ジッと見ていると、突然カチンと金属音がして、尖った何かが突き出された。

バサバサガリガリと音は大きくなり、突き出されたものがグイグイとひねり回されて、スリットの隙間を広げていった。

僕の身体は布団の中で硬直し、逃げ出すことも声を上げることも忘れていた。

今や出てきたものの正体を、僕ははっきりと見定めていた。

傘だ。

殺人鬼のナイフみたいに凶暴な切っ先が、金属製のスリットをねじ曲げ、やがて外枠ごと壊し去った。

傘を握った肩がグイと出てきて、その後から長い髪を垂らした女の顔が覗いた。

それが生きた人間なのか幽霊なのか、僕には判断がつかなかったが、まともな相手じゃないことだけはわかった。

白い片眼が僕を睨みつけ、そいつは狭い換気口からズルズルと身体を引っ張り出した。

上半身が出て、畳の上に傘を握りしめたまま、その全身が落ちた瞬間、僕の意識は飛んだ。

誰かの呼ぶ声で目が覚めた。

夜が明けていた。

部屋に女の姿はなく、押入の上の換気口は壊れてもいなかった。

四話 魎

伯母の夫が亡くなって、数年経つ。

夫という人は生前精神科医を勤めていてドライだったのか、自分の葬式や法事などいっさい必要ないと言っていたそう。

その言葉に従って、伯母は葬式も出さず、お骨も家の押入に入れたままにしていた。

息子も娘も結婚して家を出、広い屋敷に伯母は長らく一人で暮らしていた。

それが、近ごろ布団に寝ていると、ふと隣に人の気配を感じるのだという。まるで隣にもう一組布団があって、そこで人が身じろぎしたり、寝返りを打ったりするような気配がするのだそう。

暗い部屋の中で目を開けて隣を見るが、もちろん人の影どころか布団すらない。

そんな夜が幾晩か続いた。

ある夜、はっきりと人の気配がした。

微かなにおいも……。

夫がよくつけていた整髪料のにおいだった。

伯母は目を開けることができなかった。

間違いなく、隣には夫が寝ている。

寝返りを打つ気配がはっきりと伝わってきた。

スースーと寝息が聞こえる。

伯母は身を固くして聞いていた。

やがてそれは大きな魎になった。

脳溢血で死んだあの夜、夫はこんなに大きな魎を立てていた。

そのまま一睡もできなかった。

夜明けとともに魎は聞こえなくなり、伯母の身体は自由になった。久しぶりに押入の中から骨壺を取りだしてみると、壺の中にいっ

ぱい水がたまっていたという。

五話 テント

蒸し暑かった。寝苦しくて目が覚めてしまったようだ。

夜中の一時か、あるいはもう二時か。

波の音が耳につく。時計を見ようと、頭を起こした。

その時――。

ザク……。

足音？

身体が凍りついた。

その島は本島と橋で結ばれていた。

浜の名を教えてくれたのは、フェリーで知り合ったサーファーだった。丸山と名乗ったその男は、大学を中退して今は証券会社に勤めていると言った。

ボードは民宿に預けっぱなしにしてあるのだそうだ。長めの休暇が取れたら、原付にまたがり大阪湾からフェリーに乗って、手ぶらでやってくるのだと言う。

「五日くらいはその浜におると思うから、時間があったら寄ってみてや」

だが、僕が浜に立ち寄ったのは、ちょうど一週間経ってからのことだった。丸山はもちろん他のサーファーの姿もなく、夏休み明けのビーチには、地元民らしき家族連れの姿がちらほら見えるだけだった。

砂浜にバイクを止めて TENT を張っていると、子供の手を引いた男が近づいてきた。

「これ一人用ですか？」

「ええ」

「ふうん、こんな小さいのがあるんだ」

人間一人プラス手荷物程度を押し込むのがせいぜいのサイズだが、バイク旅には小さく畳めるのが利点だ。

二言三言しゃべって、男は自分のテントへ戻っていった。

夕方、晩飯をどうしようか考えているところへ、また男がやってきた。

「これ、どうぞ。ムーチャー」

柏餅みたいなのを差し出した。月桃^{げんたう}の葉で包んだ沖縄の餅なのだそう。

「じゃ、僕ら引き上げますので」

「そうなんですか」

てっきり今日はテントで寝るのだと思っていた。

「明日は仕事ですから」

そうだ。僕は長い休暇に時間の感覚をすっかりなくしていた。この日は七日、九月に入って最初の日曜日だったのだ。

夕日が水平線に近づくに従って、ちらほらいた海水浴客は次々と荷物をまとめ始めた。やがて日の落ちた浜辺に、僕のテントだけがポツンと残された。管理人も入り口にチェーンをかけると、サッサと帰っていった。

辺りに民家はなく、トイレ兼シャワー室の灯りだけが、ぼうっと灯っている。ラジオの野球中継も終わり、ビーチ前の道路を何度も往復していた暴走族もどこかへ去ってしまった。

波の音だけが聞こえる浜辺に、時折金属的なトッケイの鳴き声が響く。沖繩に來た初めの頃は驚かされたが、一週間もいるとその大型ヤモリの声にも慣れた。

彼らの巣窟と化しているトイレに行き、テントに潜り込んだが、

妙に寝つけない。

そよとも風の吹かぬ浜は、横になっているだけでジワジワと汗がにじんできた。入り口を大きく開けると大型の蚊がうなりを上げて飛び込んでくるし、無理に目を閉じていると、波の音がやけに耳にいった。

長い時間悶々としていたが、それでもいつの間にかうとうとしたようだった。

グッ……グッ……。

確かに砂を踏む音だ。誰かが歩いている。

冷や汗が吹き出した。

強盗か？ いきなりテント越しに襲いかかれたらどう対処する？

グッ……グッ……グッ……。

テント入り口の僅かな隙間から様子をうかがうが、人の姿は見えない。

こちらの身じろぎを察したのか、足音はやんだ。

外に出るべきか相当長い時間悩んだ気がしたが、おそらくほんの数秒だろう。

僕は思いきって入り口のチャックを開けて飛び出した。

テントの周りには誰もいなかった。五、六十メートル離れたところに、トイレの灯りがぼんやり灯っているだけだ。

僕は小さなバケツ型の虫除け兼ランタンに火をつけ、入り口に置いた。何かの効果があるとは思わなかったが、少しでも明かりがほ

しかった。

テントに潜り込んだが、もう寝られなかった。

日が昇るまで、たったの数時間だ。

ザク……。

不意にすぐ傍らで足音が聞こえた。

物盗りならまだましかもしれない。

「おい」

震える声で呼びかけてみた。

ザザッと、明らかに波の音とは違う音がした。テントをブラシのようなもので擦る音だった。

ザザッ……。

何の音だかわからないが、外に出てみる勇氣はない。

グッ……グッ……グッ……グッ……。

またテントの周りを歩く足音が聞こえた。

僕は狭いテントの中で、ますます身を縮めた。

突然バンとテントが叩かれた。

でも衝撃は全くない。テントはビックリとしなかった。早くどこか行ってくれよって祈るような気持で頭を抱えた。

ババッ。

音の方へ目をやると、外側から手の平がテントを押していた。

本当なら布団でも引っ被るところだが、何もないテントの中では、ただ身体を震わせるしかなかった。

ガサガサと音がして、不意にテントがたわんだ。

テントの薄い布地に、人の顔が押し当てられていた。

そちら側はコンクリートの堤防にびったりと沿っていて、人が入るスペースはないはずだ。無理に入ろうとすれば、テントの裾を踏んだり身体の他の部分がテントに触れる。

二つ三つと顔は増えていき、僕は頭を抱えてテントの床に蹲った。気がつくとも海の方が明るくなっていた。

沖縄戦降伏の調印式が行われたのが、一九四五年の九月七日だったと、後に知った。

あの浜で何があったのかは知らない。

六話　て

阪神淡路大震災があった時のことだ。

澤井さんは携帯電話の鳴る音で目が覚めた。窓の外はまだ暗い。

福井のビジネスホテルに前日から宿泊していた。

電話は出張先の営業所の部長からだった。

テレビを見たか？　神戸で大地震があった、今直ぐ帰った方がいい……。

部長が切符を手配してくれた。澤井さんは大阪へ向かう特急に飛び乗った。

自宅に携帯で何度も電話を入れたが通じない。当時の携帯は普段でも繋がったり繋がらなかったりしたものだ。使えるエリアも限ら

れていたし、高速道路では必ず途切れた。

昼前には大阪駅に着いた。駅構内は神戸方面へ向かう人々の群と交通案内のアナウンスで充滿していた。人の顔は不安と殺気でどす黒く浮腫むくんでいた。

大阪からの電車は尼崎で止められた。そこからは歩くしかなかった。

澤井さんは歩きながら自宅と本社に何度も連絡を入れたが、相変わらずどちらも繋がらない。

携帯電話の電池切れが心配になりだし、ポケットに突っ込んだ。その瞬間、携帯が鳴った。

ディスプレイに自宅の番号が表示されていた。

安堵したのか、澤井さんは膝が崩れそうになった。無事なのだ。家族が生きている。

受話器を耳に押し当てた。繋がっている。

が、沈黙したままだ。

「おい、誰だ？　無事なのか？」

耳に微かな息づかいが聞こえたような気がした。

「おい！」

「……て」

「何？」

不意に電話は切れた。バッテリーの残量はゼロだった。聞こえたのは、息子の声だったと思った。

自宅が近づくにつれて、空が暗くなった。朝から曇り空だったが、

街を煙が覆っていた。

異様にガス臭いところがあったり、瓦礫の下に埋もれている家族を救出しようと必死で屋根を剥がしている人がいた。

時々地面がぐらぐらと揺れた。道路は倒壊した家屋やビルによって塞がれ、その隙間を神戸から出ようとする人、あるいは家族の元へ向かおうとする者が躊躇めきながら歩いていた。

重い瓦屋根に押しつぶされている家があちこちに見かけられた。どこかでうめき声が聞こえた気がした。澤井さんは聞こえなかったことにして、足を速めた。思わず口の中で、すみません、と呟っていた。

知っているはずの街の様相が変わって、どこを歩いているのかよくわからなくなった。道を電柱や塀、家屋の残骸が埋め、わずかな距離を行くにも苦勞した。

いつの間にか、夕闇が迫っていた。もう家の近くにいるはずだ。

「澤井さん」不意に呼ばれた。

振り向くと、顔見知りのご主人が立っていた。

「うちは……つぶれました」

「それは……」澤井さんはどう言えいいのかわからなかった。

「わ、私の家は……」

「わかりません」ご主人は首を振って、そのままフラフラとどこかへ歩きだした。

改めて見回してみると、見覚えのある郵便ポストが立っていた。自宅から数メートルのところにあったポストだ。背後の塀に押しつ

ぶされることもなく立っていた。

自宅はそこからすぐだった。

門柱だけが立っていた。その内側の家屋は完全に重い屋根の下敷きになっていた。澤井さんは必死になって奥さんと子供の名前を呼んだ。電話が置かれていた応接間の辺りを、手に血を滲ませながら掘り返した。

気がつくといつの間にか辺りは真っ暗になっていた。先程まで聞こえていた人々の声は聞こえなくなっていた。

海の方が赤かった。炎が空に映っているらしい。

疲れ果てて、澤井さんは瓦礫の上に座り込んだ。

ふと傍らに目をやった。応接間のドアが真つ二つになって転がっている。澤井さんは端を持ち上げひっくり返した。ドアノブに何かがくっついていた。

顔を寄せた。ノブを握る小さな手だった。中身はなく、手首から先の皮だけがノブを掴んでいた。

息子と奥さんの死体が発見されたのは数日後だった。応接間とは離れた場所だった。

あの時間こえた受話器の向こうの「て」というのは、「手」のことだったと澤井さんは思っている。ただし、検死の結果では奥さんと息子はほぼ即死だったという。

七話 鈴

母がまだ幼い頃のことである。戦後間もなくの時代だ。

母は三人姉妹の末っ子だった。ある日親戚で不幸があり、祖母と姉妹が手伝いに行った。子供の足で歩いて一時間近くかかる隣町だった。その家を出たのは夜の九時を回っていたという。当時は公共の交通機関などはなく、歩いて帰るより仕方がなかった。

私の故郷は高知である。

高知は遍路が多い。それは今でも同じだが、昭和の五十年頃まではまだお布施を乞い放浪するように歩いて回っている人たちがいた。彼らは家の玄関に立って、ちりんと鈴を鳴らしながら念仏を唱える。家の者はお金をあげたりご飯を食べさせたりする。

飯に味噌汁をかけたものを、故郷ではへんど汁と呼ぶ。へんどというのは遍路のことだ。私が味噌汁をかけて食うと、父はへんど汁なんか食うなと怒ったものだ。

親戚の家で不幸があった夜、母たちは海岸沿いの道を親子四人でとぼとぼ歩いて帰ってきた。途中にへんど岩と呼ばれる大きな岩がある。遍路がその根本に腰を降ろしてよく休んでいた。岩の出っ張りがちょうど庇のようになっていて、雨や日差しを避けるのに都合がいい。

それより数年前のことだった。その岩の根元で年老いた遍路が死んでいたそうだ。

へんど岩に差し掛かったところで、一番上の姉が不意に、この岩のところやったんよねって言った。

すると、どこかでちりんと鈴が鳴った。

皆が一瞬ぎょっとして足を止めた。闇を透かして岩の根本を見たが、誰もいない。

無言のまま行き過ぎようとした、その時、また鈴が鳴った。

振り向いたが、やはり誰もいない。

闇の中で鈴の音がもう一度、ちりんと鳴った。

その後、四人は一度も後ろを振り返ることなく、家まで急ぎ足で辿り着いた。家の玄関を潜るまで、ずっと鈴の音は後ろをついてきた。

家に入ると、鈴の音は諦めたように聞こえなくなった。

八話 石

亡くなった伯父は生涯独身で過ごした。兄弟はみんな都会に出てきて、祖母が京都の病院に入院した後は、伯父とはほとんどつき合いがなくなった。

どんな生き方をしていたのか、誰も知らなかった。遺品の整理をしてみても、それ以上ないほど質素に生きていたことだけはわかった。便利屋のようなことをしていたらしい。田舎の便利屋とは、要は無職同然で、時折誰かに頼まれた用事をこなして賃金を得ていたということである。

祖母が入院することになった十五年前と比べて、新たに増えた家財道具は何もなく、家の修繕もされないままで、台所の床は根太が抜けてぶよぶよしていた。

「石が好きだったね」葬儀に顔を出した近所の人が言っていた。趣味を持つほどの贅沢もできなかったからか、どこかで見かけた石を拾ってきて土間にいくつも並べてあった。特に変わった石ではない。隕石や水晶や、そんな値のつく類いのものは一つとしてなかった。一番下の叔父が石を全部庭へ放り出した。五、六十個はあった。

京都の祖母は認知症が大分進んでいて、息子の死を報せてもボカンとしていた。

数日後母が見舞いに行くと、祖母はたどたどしい言葉で、隆一が夜中にやってきて隣のベッドに寝ていたと言った。隆一というのは、亡くなった伯父である。

「呆けたなりに何かを理解しているのかもね」と母は言った。

半年ほど経った頃、石を放り出した叔父が亡くなった伯父の位牌を持ってやってきた。うちでは祀れないと言って、置いて帰っていた。

わけがわからなかったが、母はとりあえず仏壇へ納めた。

その夜母が風呂に入っていると、不意に高窓が叩かれた。ワイヤー入りの窓が破れるかと思うほど激しい叩き方だった。母は湯船の中心で身をすくめた。

「誰？」「仁？」

初めは僕が悪戯していると思ったらしい。だが、答えはなかった。

ジツと耳を澄ませていると、また窓が叩かれた。ガシッガシッと硬いものをぶつけるような音だった。

母は風呂を飛び出し、バスタオルを巻き付けて二階へ駆け上がった。

父は晩酌をしながらナイターを見ていた。「風呂の窓を？」

玄関を出て、グルッと家の周りを見て回った。人のいた様子はないかった。

「犬が吠えなかったじゃないか」

玄関には黒い柴犬が寝ている。人の気配にはかなり敏感に反応する。知らない人間が敷地内に入ってくると、猛烈に吠えかかる。その犬が知らん顔をして寝ていた。

「石だわ」

「はあ？」

「窓を叩いたのは石よ」

「誰が？」

母はその時口に出さなかったが、伯父の顔を思い浮かべたそうだ。

翌朝、門の傍らに拳大の黒い石が一つ転がっていた。それが伯父の家の土間にあったものかどうかはわからない。

九話 障子

中学時代の修学旅行だった。

二日目の夜はみんな疲れていたのか、いつまでも騒ぐこともなく

早めに床に入った。

どのくらい寝たのか、何かの気配で目が覚めた。

すーすと、最初は誰かの寝息かと思った。なぜか身体が強ばって、首を動かせない。音はいつまでもやまなかった。

横目でうかがうと、右隣のやつは向こう向きに寝ていた。音がするのは反対側、窓の方だ。そっちは板張りのスペースがあって、端っこに洗面台がある。座敷とは障子で隔てられていた。

その障子が開いたり閉まったりしていた。微かに何度もすーすと開け閉めが繰り返される。

不意に窓から月明かりが差し込んだ。

息を呑んだ。舌が巻き上がって悲鳴は出なかった。

板張りに置かれていた籐の椅子に誰かが座っていた。その黒い人影が障子を開けたり閉めたりしていた。

少し落ち着いてよく見ると、人影はどうやら自分と反対の廊下側の端で寝ていた同級生らしいと気づいた。そいつが部屋の内をジッと見つめて藤椅子にあぐらを掻いて座っているのだった。

障子はその間もずっと開いたり閉まったりを繰り返す。同級生だとわかってても、何度も同じ動作を繰り返すのが気味悪くて、目を据えたままどうにか右隣の蒲団にじり寄った。

椅子に座った人影が口の中で何か呟いた。

(くる、くる、くる、くる、くる、くる、くる)

相変わらず障子を開け閉めしながら、そう呟いている。
(くるな、くるな、くるな、くるな、くるな、くるな、くるな)

今考えるとおかしいが、こっちは必死でそう唱えた。
いつの間にか寝ていた。

そいつはそのまま精神病院へ入院した。在学中に復帰することはなかった。

十話 水管

友人の山本は素潜りをする。ダイビングというよりは素潜りだ。今時流行らない真っ黒のウェットスーツを着込んで、ウェイトを腹に巻いて潜る。夏にはハマグリを大量に獲って、僕にもお裾分けをくれることがある。

去年のことだ。山本はいつもの浜へ行った。

湾になった砂浜を横断するように泳ぎながら、ハマグリが眼を出しているのを探す。眼と言うが、本当は海水を入れたり出したりする水管のことだ。

ハマグリは干満の状態や季節、潮の流れなどによって、毎年いる場所が違っている。浅いところに固まっている時には楽だが、深いところにいるとなかなか見つけづらい。ハマグリのお眼だと思って潜っていつて掴むと、砂に隠れた大きなエイが飛び出してくることもあるらしい。心臓が止まりそうになると笑うが、エイだっていきなり眼を掴まれたら卒倒しそうになるだろう。

去年は割と深場にハマグリが固まっていたそうだ。大きな水管が見えた。周りをよく見る。エイなら近くにもう一つ眼があるはずだ。

眼のありそうな距離に水管はなかった。大きく息を吸い込み、一
気に潜った。といっても三メートルもない。

手を砂に差し込んだ。

妙な感覚があった。

ハマグリの殻ではない。エイとかヒラメに似ていたが、飛び出し
てくることもなかった。

山本は手を引っ 込めた。

砂から何かが出た。

手のように見えた。それも二本。

引っ 込んだ山本の手を探るように、左右にふらりふらりと揺れた。
小さな子供の手のようだった。

山本は激しくフィンを蹴り、全力で浜辺に引き返した。タイヤチャー
ブの浮き輪とそれにぶら下げたエグリ（獲物を入れる網のことだ）
をその場に残して。

消防隊と警察が引き上げたのは、その前の夏に行方知れずになっ
た子供の死体だった。

普通は魚に食われ波にもまれて、骨もバラバラになってしまうは
ずだ。どうして一年もの間生前の姿のままでそんなところに沈んで
いたのかは、誰も説明できなかった。

「ハマグリは全部棄ててきた。もう二度とあそこへハマグリ獲りに
行くことはない」

山本はそう言った。

十一話 眼

小学校の校長先生が自習時間に来て話してくれた。その先生も人
から聞いた話だと言った。戦後少し経ってからのことだったという
から、もう七十年も昔の話だ。

仮にAさんとしておこう。Aさんは当時行商をしていて、ある晩
呉の音戸にある旅館に泊まったそうだ。当時は娯楽もなく、飯を食っ
て湯を浴びたら、何もすることがなかった。Aさんは早々に蒲団に
潜り込んだ。

夜中にふと目が覚めた。

女の声が聞こえた。何かを哀願しているようだった。あるいはお
経でも唱えているような。

狭い廊下を挟んだ向かいの部屋からだった。

Aさんはすっかり眼が冴えてしまった。だんだん腹が立ってきた。
うそ寒い蒲団を鼻の上まで引き上げて、眼だけを暗闇の中でぎょろ
つかせた。

声はいつまでも止まなかった。

小便にでも行くか……廊下と隔てる障子は滑りが悪く、ガタガタ
と音を立てた。

途端に声が止んだ。

暗がりに眼を凝らすと、向かいの部屋の障子が細く開いていた。
思わずその隙間を眼で辿った。

向こうからもこっちを覗いていた。見開かれた片眼が白く光っていた。

Aさんは全身から汗が噴き出したという。

便所に行くのも忘れてもう一度蒲団に潜り込んだ。

こっちを見ていた白い眼が頭から離れなかった。汗が浴衣を濡らして、手足は氷水に漬けたように冷えた。

外してあった腕時計を手繰り寄せてみた。まだ午前三時すぎだった。

再びささやくような声が部屋の中に滑り込んできた。

ふと障子の方へ眼をやった。開いたままになっている。閉め忘れていたのだ。

ノロノロと障子まで這って行った。

つい隙間から覗いてしまった。やっぱり女の眼がこっちを見ていた。障子にのしかかるようにして、ジーンと見つめていた。

気がつく、朝になっていた。Aさんは畳の上にひっくり返ったままだったらしい。

仲居が慌ただしく走り回っていた。向かいの障子が開いていて、敷居のところに女が膝立ちになっている。髪の毛の下から白い眼がこっちの部屋を睨んでいた。

女の首は腰紐で鴨居と繋がっていた。

Aさんは警察から事情聴取を受けた。検死の結果、女は昨夜十二

時前に死んだと聞かされた。

「いや三時すぎに声が……」

寝呆けて時計を見間違えたのだろう、と警察は笑った。

十二話 髪

友人の一人に、腹が立つくらい女に持てるヤツがいた。顔も良かったが性格も良かった。オレも女だったら惚れたかもしれない。

高二の一年間に数えたら、十四人の女から言い寄られていた。

「別に飽きっぽいとかやないけど、一人の女とだけつき合わんでもええかな、と」

断って相手が泣きそうな顔を見せると、気の毒になってしまうのだと言う。結局何人もの女とつき合い、それがバレて不実なヤツだと思われてしまうことになる。それでも、言い寄ってくる女は後を絶たなかった。

高三の二期、一人の女を振った。

「国立大行きたいから、今年は女絶ち」と笑った。

ある日、学校を出ようとすると、その友人が寄ってきた。

「焼却炉へつき合ってくれ」

炉の前で、通学バッグを開いて見せた。長い髪の毛がごっそり入っていた。

友人は教科書を取り出し、炉の中へ絡みつく毛をはたき落とし、最後はバッグを逆さまにして何度も振った。

「恨まれてるやんけ」

「オレが悪いんか？ 向こうが勝手に好きになってるだけやん」

「誰の毛？ この前振ったヤツか？」

「知らん。あいつ学校来てへんみたいやし」

しばらくは何事もなく過ぎたが、一月ほどしてそいつがやけに暗い顔で現れた。期末テストの初日だった。

「勉強してないのか？」

首を振った。「勉強はしたけど、気色悪いことがあった」

前夜遅く風呂に入った。タイルに足を下ろした瞬間、違和感があった。それまでの人生で一度も味わったことのない変な感触だった。

風呂場に大量の髪の毛が散乱していた。

足の裏をくすぐるような、ザワザワと蠢いているような、まるで何か生き物を踏みつけたような感じがしたらしい。

「散髪屋の床に落ちてるとはレベルが違うねん。束になってんねん、束に。家族みんなで騒いだけど、原因はわからへんかった」

夏に振った女の名前があった。

「あいつ、こんな時期に引っ越ししたらしい。普通せんやろ、高三やのに。頼むから、様子見てきてくれへんか？」

新幹線なら三時間弱の街だという。

「電車代出すから」

オレはそんな遠くから大量の髪の毛をバッグに詰めてやってくる女を想像すると笑い出しそうだったが、悲愴な顔の前に頷いた。

「ただし、お前も一緒に来い」

次の土曜日、オレたちは女のいる街へ向かった。新幹線から私鉄に乗り換え、あらかじめ調べておいた駅で降りた。女の家はすぐに見つかった。まるで待ち構えていたように、マンションの入口から女が現れたのだった。

髪の毛は以前より短くなっていた。

「あれ？」向こうは驚いた顔でオレたちを見た。「どうしたの？」

「いや……あ、あの、毛切ったんや？」

「うん、すっきりしていい感じでしょ？」女は屈託無く笑った。

毛を切ったとはいっても、大量の束をバッグや風呂場にぶちまけるほどの量を切ったとは思えない。それに……以前より明るい雰囲気だ。

「もしかして私に会いにきてくれた？」

早々と大学への推薦入学が決まり、父親の仕事の都合もあって、学期途中だったが引っ越しすることにしたのだという。

「もうお別れやからね、最後にちょっとつき合ってみようかな、と思って告白したんやけど、見事振られたわ」

髪の毛を鞆に詰めたり風呂場に撒き散らしたりするとは思えない笑顔だった。結局三人で駅前まで戻りハンバーガーを食って別れた。

年が明け、オレはそいつと天神さんへ合格祈願に行った。帰りにそいつが封筒を拾った。表も裏も何も書かれていない白の封筒だった。

「放っとけや」

「いや、大金が入ってたりしてな」

開けた途端、そいつが封筒を放り出した。

中に一束の髪の毛と使い古した御札が入っていた。

後に知ったが、それはどこかの地方の伝統で、封筒を拾った男は今は死んでしまった髪の毛の主と、死後あの世で結婚させられるらしい。

そいつは国立大に落ち、オレと同じ私大に進んだ。

「あれは特定の女の恨みとかじゃなく、お前がおもちゃにした全女の恨みの髪の毛やと思うぞ」

「アホか、お前。それならホストなんか毛だらけやないか」
そうかも、と一瞬思った。

「ホンマ、もう長い髪の毛って気色悪うてしゃあない。今は下手したら、男の方が好きになりそうや。特に短髪のヤツ」そう言って、友人はオレの頭をチラッと見た。